

美術の窓(88)

アテネ・パルテノン神殿の全貌

—連続講演に寄せて—

大和文華館館長 水田 徹

アテネ・オリンピックを目前に、アテネのシンボルともいべきパルテノン神殿の雄姿をテレビや新聞紙上で目にする機会も増えてまいりました。にもかかわらず、この神殿がかつては黄金象牙製の本尊を擁し、正・背面の破風は等身に倍する丸彫り彫刻に埋め尽くされ、神殿四周の列柱の上には1.3メートル四方の高浮き彫り板が92面も張り巡らされ、さらにその奥の神室外壁の最上段には、全長160メートルに及び連続浮き彫りが施されていたことはあまり知られておりません(図1)。

そこで今回、アテネ・オリンピックの開催を機に、以上4種の彫刻群の全容をご紹介しますべく、連続講演会を催すことになりました。10年ほど前に、3ヶ年にわたる実施調査で現地の様子もつぶさに見て参りましたので、その調査結果も踏まえ、スライドを多用しつつお話を進めて参りたいと思います。

お話の焦点は、建築施工主がパ

ルテノン神殿の造営にかけた情熱とその意を汲んだ芸術家たちの工夫のあとを、上記4種類の彫刻群の主題と形のなかに読み取ることです。本稿ではその準備作業として、パルテノン神殿の建立に至る経緯と、パルテノン附属彫刻群の全体構造、そして今回の連続講演のトピックスとなるいくつかの着目点について、そのあらましをご紹介します。

紀元前6世紀前半、古代ギリシアの政治・経済は安定期を迎え、全国各地に都市が形成されます。ただし古代ギリシアの都市は政治・行政的にそれぞれ一つの国家のような独立した主権を備えていたために別途、都市国家(ポリス)とも呼ばれます。当時のギリシア人にとっても「ギリシア国」とは、ギリシア語を話す点を唯一の共通項とした都市国家の集合体に過ぎませんでした。都市国家同士が争ったり、同盟を結び合ったりは日常茶飯のことでした、4年に一度のオ

リンピックは、全ギリシア人が都市国家を超えて相集い、民族としてのアイデンティティーを確認する絶好の機会でもあったわけです。

ところが前6世紀の末に、そうは言っていられない事態が生じました。東の帝国ペルシャが版図を広げ、ついに前490年、その大軍勢がギリシア本土にまで迫ってきたのです。マラソン競走の語源となったマラトンの地での戦いがその緒戦で、ギリシア側は都市国家連合軍を組み、奇跡的に勝利を収めました。そしてこの戦勝を神に感謝するべく着工したのが現在のパルテノン神殿の前身である旧パルテノン神殿です。ただしこの旧神殿はまだ建設途中の前480年に、ふたたび侵攻してきたペルシャ軍に焼き払われ、ついに未完成に終わりました。

翌前479年にかけて、サラミスの海戦とプラタイアの戦いでギリシア連合軍は最終的に勝利を収め、ペルシャ戦争は終結しますが、パルテノン神殿はすぐには再建されませんでした。敵の蛮行の証として旧神殿を焼け落ちた姿のまま保存することにしたのです。

それから30余年、その間にアテネを盟主とする対ペルシャ防衛同盟(デロス同盟)が結成され、同盟金庫がアテネに移され建設資金の目途も立ち、さらにペルシャとの間に平和交渉(カリアスの平和)が成立するに及んで、紀元前447年、ついにパルテノン神殿の再建が始

まります。

新神殿は旧神殿の真上に建てられました。ただし正確には奥行きをやや縮め横幅は広げて、細長さの目立つプランから、縦横にバランスのとれた、厚みのある構造に変更されたのです。焼け残った旧神殿用の石材をそのまま再利用できるというメリットを捨ててまで実行されたのですから(現に基礎の石積みはほとんどそのまま再利用されています)、この設計変更にはよほど強い理由があったのでしょう。それが何であったか、連続講演の最後に明らかに出来ればと願っています。

本尊は都市国家アテネの守護神であるアテナ女神の像で、楯と楯を左腕にかけ、右手に勝利の女神ニケを載せた姿で神室の中央やや奥に佇立していました(図1の右奥、円柱の間に覗いて見えます)。ギリシア神殿の本尊は普通は神室の奥の壁に張り付くように安置されますが、パルテノンでは本尊の背にも円柱を巡らすことによって、本尊が奥行きのある実空間の中に在るような効果を生んでいます。作者が本尊に込めた思い、ひいてはパルテノン神殿の真の造営目的を読みとる鍵がそこに隠されているように思われます。

残る3種類の彫刻群には、それぞれの設置場所にふさわしい主題が選ばれています。上から下へ、外から内へ、まず天に一番近い東西の破風は神の世界の出来事(神

図1 パルテノン神殿構造図

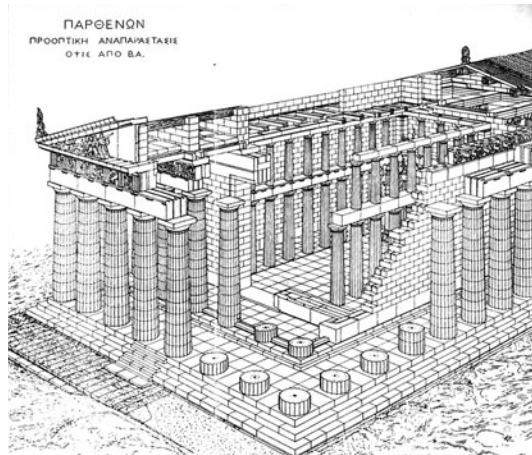


図2 パクシ出土 クラテル断片



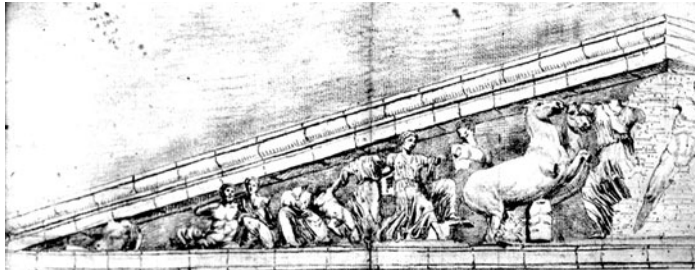


図3 カレー画 パルテノン西破風

話)を表し、そのすぐ下の軒周りには同じく神話ながら英雄が主役となる物語を、そして一步内側の、外からは一番見えにくい、しかし本尊に最も近く位置する神室外壁には、人間が主役となる、しかも私の考えでは本尊に最も直結した、図像が選ばれています。

技法的にも工夫が凝らされます。太陽が照りつける破風には丸彫り彫刻を、その軒下に肉厚の高浮き彫り、そして直射日光のほとんど当たらない神室外壁には薄浮き彫りを配するという具合に、彫刻の彫りの深さを射し込む光の強さに応じて変えているのです。これは一個の人体像を作る際にも適用される基本的な彫刻技法で、ギリシアの神殿は一体の彫刻のようであると称される所以です。

東正面の破風はアテナ女神が父神ゼウスの頭から成人した姿で生まれる場面が描かれています。アテナはこの神殿の主ですから、神殿正面の主題にその誕生の奇跡物語を選んだというわけです。ただ現存する彫像の姿勢や向きをつぶさに観察すると、全体構成は女神誕生の瞬間を神々が見守るといった単純なものではなく、誕生の正確な時間や女神の産声が天界に響き渡る様子までが、神話の筋通りに忠実に、しかも劇的に彫刻化されていたことが判ります。

全く失われてしまった破風中央部分の図像について、アメリカの学者が全く新しい、しかも誠にリーズナブルな新復元案を提示し、後にスイスで行われた国際学会で当人を目の前にして、その新説の

正しさが別の学者の提供した新資料(図2)によって見事に照明されました。たまたま私もその場に居合わせましたので、その時の会場の興奮と感激ぶりもお伝えできればと願っております。

西破風の中央部の図柄は17世紀に描かれた素描(図3)によってほぼ正確に再現することが出来ます。誕生したアテナ女神が都市アテネの領有権を海神ポセイドンと相争う場面ですが、素描を見る限り、神話の上では敗者となる管のポセイドンが勝ち誇るかのように脚を大きくアテナ女神側に踏み出して、どうもいまひとつ理屈に合いません。ドイツの学者がその点に着目し、西破風についても新解釈を発表し、奇しくも今度はその学者の愛弟子が発掘した出土品によって、新説の正当性がほぼ実証されました。これもまた感動的なお話で、ぜひ詳しくご紹介したいと思います。

軒下を飾るメトープ高浮き彫り板は、北側にトロイ戦争、西にアマゾン戦争、南にケンタウロス退治と、何れもギリシア神話の英雄を主人公とした戦闘図で、神殿正面に当たる東側は神々自らが巨人族を成敗する場面です。ただし神殿の南側面を飾っていた20数面を除いては破損・欠失が多く、また時間の制約もあり、今回の講演ではメトープ板個々のご紹介は残念ながら割愛させていただきます。

二日目の講演のテーマはフリーズと呼ばれる連続浮き彫りとその本尊との関係です。図1で見て頂



図4 パルテノン北フリーズ部分

けるように、フリーズは神室の四周を巡る壁の最上段(東西面では女関の列柱の上)にはめ込んだ石材の表面に刻まれており、東西南北合わせて凡そ160メートルあります。図像は彫りの深さ最大5.6センチと極めて繊細な作りになっており、そのわずかな厚みの中に4頭立ての馬車をはじめ、騎馬行列図では最大8頭の馬の重なりが「ずらし彫り」の技法を基本に、あらゆる手法を駆使して表されています。その工夫の跡を辿りつつ、個々の図像に意味と解釈を加えてゆく作業は本当に楽しく、かつ劇的ともいえる発見を伴います。スライドを沢山お見せしながら、その感動を少しでも多くお伝えできればと念じています。

フリーズの主題はアテナ女神を崇めて4年に一度催される大祭(パンアテナイア)の祭礼行列の実景で、生身の人間の姿が画面の大部分を占めます。ただし実景と申しても紀元前何年の祭礼といった具体的な歴史事実が描かれているわけではなく、人間像も日常茶飯の様子ではなく、あくまでも宗教儀式に参列する、信仰心あふれる姿に描かれます。

例えば行列の先頭近くを進む「水瓶を担ぐ青年たち」(図4)の右端の青年の屈んだポーズは、水瓶を持ち上げるところ、あるいは水瓶が重いので一旦降ろすところ、などいろいろに解釈されます。しか

しながら、すぐ先をゆく残り3人の青年の立ちポーズと仕草を相互によく見比べると、結果的に屈んだ青年は明らかに瓶を持ち直すところ、すなわち祭礼のクライマックスを目前にした緊張の瞬間、つまりは信仰心の深さを表している、と解釈できることが判ります。同様の図像解釈は、講演会当日スライドで詳しくお見せ致しますが、ほとんどすべての人間像、いや動物像にさえ当てはまります。

パルテノン・フリーズについて今一つ注目すべきは、総数370余体の人間像と240余頭に及ぶ動物像に、ある決まった員数が適用されているように思われる点です。行列は神室の南北の壁に沿って二手に分かれて行進し、東面で合流するような形に表されており、両行列に同じ役割の人間がほぼ同じ順序で登場します。ところが役柄毎にその員数を数えてみると、南回りの行列には10という員数が頻繁に出現し、一方北回りの行列では4が基数となっています。パルテノン神殿の施主と施工者はこの数にどんな意味を込めたのか。そこに我々は何を読み取るべきか。2回にわたるお話でその点が少しでも明らかになればと祈りつつ、作品鑑賞と図像解釈のバランスのとれた講演会になるよう準備を進めております。

沢山の皆様のご来場を心からお待ちしております。